

科目区分：学校教育実践コース(国語教育専修)

授業科目名：書写書道概説

大学生の文字を書く技術は上達したか

国語教育講座・東 賢司

はじめに

書写書道概説は、中学校の国語免許を取得するための必修科目である。国語専修の学生にとっては、卒業要件となるいわゆる「◎」の単位である。

受講生は、本年は 30 名で例年より少なかった。国語専修の学生は約二分の一であり、例年と同じく、副免許を取得する学生が目立っている。

現在のカリキュラムでは、中学校書写に関する科目は、この単位のみとなっており、種々のことを伝える必要がある。ただ、近年の学生の実践活動をみていると、「文字を書くのが遅い」「文字が乱雑で読みにくい」などの問題点があることは継続しており、理論を語って終わりというわけにはゆかない現状がある。そのために、本年度も「大学生として恥ずかしくない実技力を身に付ける」ことを目標として、授業を組み立ててきた。この報告ではその活動がどうであったのかを省察してみたい。

1. 授業の目的

シラバスには以下の記載をしている。

一般的包括的な内容を含む中学校の国語の教員免許状取得に必要な科目であり、中学校国語の学習指導要領中の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の「(2) 書写に関する次の事項について指導する」第一学年「ア 字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解して、楷書で書くこと。」「イ 漢字の行書の基礎的な書き方を理解して書くこと」、第二学年「ア 漢字の行書とそれに調和した仮名の書き方を理解して、読みやすく速く書くこと」「イ 目的や必要に応じて、楷書又は行書を選んで書くこと」、第三学年「ア 身の回りの多様な文字に関心をもち、効果的に文字を書くこと」の内容を段階的に学

び、文字を正しく整えて書くための学習を行うとともに、授業実践に必要な力を身につける。

また、上記は最低限の習得のレベルであり、発展的な学習によって大学生として恥ずかしくない「文字を書く実技力」を習得する。

授業時間内で、力を付けることはむずかしいので、課題などを積極的に出している。学生には「授業は、時間外学習の成果を確認する場であるとかんがえてほしい。授業や授業外の時間を通して自分の書く文字に自身が持てるようになってほしい」と伝えている。

2. 学部 DP との対応

本年度は、シラバスの到達目標覧に以下のことを記入した。

(1) 知識・理解...国語の書く行為の重要性を理解し、教師の教養として必要な文字を書く知識や情報を身につける。

(2) 技能・表現...中学校での学習内容(字形の整え方、行書の書き方、効果的な文字の書き方等)を体得し、漢字・仮名の板書の文字が正確にわかりやすく書くことができる。基本的な行書の文字を教材化することができる。大学生として恥ずかしくない書写実技力を身につける。

(3) 態度...他者との関わりによって文字を大切にすることを高め、自信を持って自ら進んで丁寧に書こうとする姿勢を身につける。

本年度も重視したのは「技能・知識」の部分である。書写活動は、実践活動であるので、「正確に、丁寧に、速く」書く力を育成することが大切であると考えからである。

3. 授業を行う上での工夫

授業時間は 90 分、毛筆学習にしても硬筆学習にしても、時間が足りないことは言うまでもない。昨年も今年も、始業のチャイムが鳴っている時には、既に授業は開始されている。また、終業のチャイムが鳴っているときには、ほぼ片付けが終了している。これは、学校現場に出た時に実技科目で経験することになる準備・片付けに手間がかかるということへの訓練でもある。

実技指導の授業が最も難しいのは、時間を守って授業が展開できることである。特に毛筆時には、それが難しい。チャイムが鳴る前に授業が始まっていると、最初のうちは「何でもうやっているの？」という感じであったが、中盤以降には、開始時間前に集合する学生がほとんどとなった。また、授業外の課題を 180 分間しっかりさせることに注意した。基本的には復習は、授業時間に消化することができなかった課題を完成させること、また次回の予習としては、次回の授業に欠かせないものを学習させたり、そのテーマ（例えば、五十音の平仮名、常用漢字の筆順等）をしっかり練習しておかないと確認作業に対応出来ないものを設定した。

また、教材であるが、本年は、板書に関しては時間を設けず、行書学習に時間を割いた。本来中学校では、行書学習が主体となるが、中学校書写では、行書学習は、楷書学習のあとに設定されているために、時間がとれないことも多い。この授業でも、例年通り、受講生の多くが、「平仮名が正確に書けない」「漢字の正しい筆順が身につけていない」という現状であり、平仮名や楷書の学習にある程度の時間をかけざるを得ないことに変化はなかった。十分な時間が確保できていないが、少しでも効率化を図ることができるように、教材を厳選し、授業外でも取り組むことができるワークシートも作成した。

4. アンケート分析と改善方法

例年授業の最終回には、アンケートの他に、作品ファイルをまとめて提出させ、そのファイルの最終頁に省察をさせている。これは、「アンケート結果や自己分析と、実際に書かれた文字を比較する」という目的があるためである。受講生は、自分では自信を持って文字を書けるようになったと思っ

際はそうではないことも多い。文字は日常的に書くものであり、その結果は多くの人ですぐに見て確認することができる。本年度は「自分の文字がどのように変化をしたか記載せよ」というまとめを課題とした。アンケートや省察を分析し私見を加えると以下になる。

①学部あるいは教員養成課程のディプロマポリシーと整合しているところと、かけ離れているところの差が大きい。

※これは、特に態度の部分である。課程の DP には「教育的愛情を持って幼児・児童・生徒に接することができるとともに、多世代にわたる対人関係力を身につけ、社会の一員として適切な行動ができる。」とあるが、これを実現することは、本授業では難しい。

②文字を書く練習は辛い、少しの上達でより意欲が増してくる

※「こどもの前で堂堂と文字を書く自信ができた」「人が見る文字を意識し江書くことに注意するようになった」「文字を書くことへの心構えが高まった」「行書についてもなめらかな運筆ができるようになった」「手本を分析してから書くくせがついた」「文字を書く姿勢が大切であることがわかった」等が多くに書かれた自己分析である。これらのことは、私が授業中に何度も注意を促していた事柄であり、半数ほどは達成できた。ただし、年々個人差が大きくなる傾向があり、また、男子学生に上達できない学生が増えている。今後の対策を検討せねばならない事項である。

③毛筆の上達よりも硬筆の上達を重視する傾向がある。

※学校現場では、国語科書写と言え、小学校 3 年生以上で学習する「毛筆」を連想するであろう。これは日本の文化的にも認知された「筆で文字を書くのが習字」ということを反映していると思われる。しかし、実際は、書写の技能が大切な場面は、日常的に丁寧に読みやすい文字を書くことであり、硬筆を使用することである。このことも学生たちに伝え、授業の後半ではほぼ硬筆の時間としたことを反映しているものと考えられる。指導要領に「伝統的な言語文化」と規定されている以上、そちらに重点を置かねばならないというジレンマもある。